

折に触れ 四字熟語

NO. 128 『明察秋毫』 めいさつ しゅうごう

< 意味 > 細かい毛までも、はっきり見ることができる意。転じて、どんな小さな事までも見逃さず、洞察できることのたとえ。眼力が非常に鋭いこと。

< 出典 > 『孟子』「りょうけいおう梁 惠王・上」

「曰、有復もつ於王者、曰、吾力足以あ挙百鈞、而不足以しか挙一羽。明足以察秋毫之末、而不見輿薪。則王許之乎。」

読み下し： 曰く、「王に復もつす者あり、曰く、『わが力は百鈞をあ挙ぐるに足るも、しかも一羽を挙ぐるに足らず。明は秋毫の末をめい しゅうごう察るに足るも、よしんも輿薪を見ず』。すなわち王これを許さんか」。

通 釈： ある男が、『おれの力は百鈞の物でも持ちあげられるのに、一本の羽根は持ちあげられぬ。おれの視力は、毛ほどのものでも見わけられるのに、車一杯の薪は見えぬ』といったとします。あなたはそれを信用なさいますか」

語 釈： 「明察」は事態をはっきり見抜くこと。「秋毫」は秋になって新しく生える鳥獣の細かい毛のこと。微細なもののたとえ。

一 言： 通釈には省きましたが、王はこの後「いや」と応えますが、先生（質問者）から「羽根一本が持ち上げられないのは、持ちあげようとしなからず。車一杯の薪が見えないのは、観ようとしなからず。民生が安定しないのは、慈愛を施そうとしなからず。同じ理屈で、あなたが王者になれないのは、なろうとしなからず。できないからではありません」と指摘されます。

参照文献： 徳間書店「孟子」 岩波書店「四字熟語辞典」